

T  
O  
N  
T  
E  
N

「おい、牛田、どうせ退屈しているんだろう。そこで、話なんだが、俺たち男子厨房に入ろうか」つてのに入ろうじゃないか」「なんだい、それは?」「早い話が、ゴキブリ亭主の集まりなんだが、まアてつとり早いところで趣意書を読むから、マジメに聞いていてくれ。

「男子厨房に入るべからず」なんてのは昔の話。世の男性が仕事にかまけ、厨房の「権限」を女房族に任せている間に、彼女らはいかに手を抜くかを考えるばかりで、いまやインスタント食品ばかりが家庭にはらんしてしまつたではないか。ならば、男性が厨房に入り、彼女らの奮起をうながそう。というわけで、おれたちも将来家庭を持たなければならぬことを考えると、お得意料理の五つや六つ、覚えといたほうがいいんじゃないかね」

「そうだな。女の強さは男女共学でバッチリ確認したからなア」「その気になつたか?」「うん。でもよウ、会が会だから、何も料理が作れなくて、それで入れてくれってんじゃない、コンプレックス感じちゃうんじゃない?」「それには

「どん天」って簡単なやつがあるんだ」「なによ、それ」「要するに、てんぷらでエビやシイタケなんか揚げるみたいに、豚肉を小さくして揚げるだけなんだ。いってみれば一口カツの天ぷら版さ。一、二度練習しとけば大丈夫だと思うよ」「わかった。でも、それだけじゃインテリジェンスがないから、名前もTON TENとか、ヨコ文字にして、みてくれもカツコよく変身させたらどうか」「どうしようってんだ」「ヤキトリの要領でさ、長めのクシに肉片を十個刺して、それにコロモをつけててんぷらに揚げる。てんはてんでも、ワン・ツー・スリー」のテンで、だからTON TENと書く」「TON TEN……そいつはしゃれてるなあ」

